

教 育 研 究 業 績 書

平成 29 年 11 月 15 日

氏 名 本 田 三 緒 子

研 究 分 野	研 究 内 容 の キー ワー ド	
畜産学・獣医学	動物臨床看護学実習、動物医療機器論、動物リハビリテーション、公衆衛生学、総合危機管理学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 ・ 視覚教育技術の利用	昭和 63 年 4 月～ 平成 16 年 8 月	ヤマザキカレッジ付属日本動物看護学院（現ヤマザキ動物専門学校）：年 1 回の特別セミナー（1 年生 300 名）本講義は、研修旅行に参加する学生向けに豪州における野生の動植物の特異な生態系やレッドデータアニマルやそれに準ずる動物について、スライドを利用して解説自然保護や環境保護について学生の理解度を深めるために最新情報を整理し、視覚的に反映させた。レポート提出をさせた。
・ プレゼンテーション導入	昭和 63 年 4 月～ 平成 16 年 8 月	ヤマザキカレッジ付属日本動物看護学院（現ヤマザキ動物専門学校）：年 1 回セミナー（2 年生 300 名）「海外における狂犬病の動向」WHO が製作した狂犬病予防普及啓発 VTR（27 分）を活用して、人と動物の共通感染症、エマージング、リ・エマージング症についてパソコンプレゼンテーションにて解説した。レポート提出をさせた。 ヤマザキカレッジ付属日本動物看護学院（現ヤマザキ動物専門学校）：年 1 回の特別セミナー（3 年生 300 名）「アニマルヘルステクニシャン、プロフェッショナルをめざして」卒業後に体験する飼い主との接遇等について解説した。レポート提出をさせた。 多くの学生に普段の講義の復習又は、ブラッシュアップの目的で緊張感と集中力を持続させる意味でプレゼンテーションは効果的であり、学生の理解度、満足度を短時間で充足させ、積極的な質問が数多く寄せられた。
・ 双方向的授業	平成 7 年 4 月～ 平成 16 年 8 月	専修学校日本動物学院（現ヤマザキ動物専門学校）：専攻研究コースグラジュエイト生の卒業論文指導調査研究計画の指導、サンプリング方法並びに統計学的手法、パソコンソフトの応用とメンテナンスの具体的指導した。ショートゼミの開催による論文作成上の問題点検討、最終稿までのステップアップを実施したところ、学生からの満足度が増しゼミ開催前と比較してまとめ上げ能力が飛躍的に改善された。

<ul style="list-style-type: none"> ・双方向性授業 デモンストレーション導入 ・双方向性授業 デモンストレーション導入 ・予習レポートによる問題の動議づけ ・実習レポートによる問題解決法への動議づけ ・実習実技の習熟度点検 	<p>平成 8 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 12 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 17 年 4 月</p> <p>平成 18 年 4 月</p> <p>平成 18 年 10 月</p>	<p>公立小学校低学年対象：生活科の授業として「動物ふれあい教室」：48 回「動物教室」：56 回、イラストパネルによる指導、拡張心音計をもちいて人と動物の心音比較、デモンストレーションによる「犬による咬傷事故防止」、動物をいじめない動物愛護思想の普及啓発、人と動物の共通感染症の予防、教育関係者を指導した。研究事業や事業参観とタイアップして、生活課の目的レベル以上の効果を発揮した。</p> <p>都民向け講習会：78 回 動物の適正飼養について「犬と楽しく暮すには」「マナーアップ、犬のしつけ方」、「ネコと楽しく暮すには」等をパソコンプレゼンテーションで講習した。 飼い犬参加方式の講習会では客観的に進行度を判断し、テスト制を用いて講習し、目標レベルに達する良い結果が出せた。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科 2 年次専門科目（動物公衆衛生学）72 人クラスにおいて予習レポートを実施し、教科書の講義内容を親しみ深いものとした。 発表等を取り入れながら説明力を身に付けさせ、ショート・テストへの応用出題により学力向上に結びつけられた。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科 3 年次専門科目（動物臨床看護学外科実習）63 人クラスにおいて、柔軟な対応力を身につけるため基本的な救命救急の VTR 等の視覚教材を用いて、其々のキーポイントをレポートで提出させた。 後に返却し、実在する症例検討の課題をロール・プレイングで発表させる際、協調性も見に付き役立っている。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科 3 年次専門科目（動物臨床看護学外科実習）63 人クラス動物病院勤務に際し、動物看護師が日常的に行う包帯法や手術補助業務について短時間で正確にまとめあげることが出来るか、実技点検項目を取り入れ緊張感をもって目標レベルに達することができるよう自己点検能力を伸ばすことを可能にした。</p>
<p>2 作成した教科書、教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修用教本 ・業務資料 	<p>昭和 57 年 10 月</p> <p>昭和 60 年 9 月～ 昭和 61 年 9 月</p>	<p>「乳類の検査法マニュアル」：食中毒起因菌の検査法「都区食品衛生監視員向け」を作成した。</p> <p>「食品衛生苦情処理集計表」昭和 59 年度版、昭和 60 年版・業種別統計と違反事例を担当した。苦情食品の異物混入事例「事故防止のための食品衛生講習会」を実施した。</p>

・業務資料	昭和 62 年 9 月	「尿毒症及び、黄疸症における検査指針」検査マニュアル作成し、全国の食肉衛生検査所で使用した。理化学部会検査データをまとめ、日常検査業務に応用した。
・業務資料	昭和 63 年 10 月	食鳥検査法のため「抗菌性物質検査法および精度管理について」全国 6 ヶ所の食肉衛生検査所において、検査薬剤各 6 剤を分担し検査法及び回収率について考察現在の食鳥検査法の基礎研究データをまとめた。
・業務資料	昭和 63 年 12 月	食肉検査のスピードアップと精度管理のため「コンピューター音声入力用マクロ病理用語」の検討資料作成委員として作成した。現在、音声入力を実施する検査所で応用している。
・ビデオ作成	平成元年 7 月	細菌性食中毒予防啓発ビデオ作成委員として、「こうして起こった食中毒」を作成し、保健所等の食品関係営業の講習会で多く利用した。東京都衛生局編
・業務資料	平成 2 年 4 月	東京都における集合住宅ペット飼育モデル案作成委員として、全国の公的機関及び民間の集合住宅でペット飼養許可をめぐる問題の基本プランとなる「集合住宅におけるペット飼養モデル案」を作成した。動物保護管理審議会答申用資料
・ビデオ作成	平成 3 年 4 月	動物愛護普及啓発ビデオ作成委員として、「どうぶつとおともだちになろう」小学校低学年～高学年の学習用ビデオを作成した。各種イベント等で上演した。東京都衛生局編
・業務資料	平成 4 年 4 月	構造改革基本プランに基づいた、保健所再編による新しい動物行政検討委員として「動物行政未来指針」を作成した。現在の再編整備計画の基本となっている。
・ビデオ作成 ・業務資料	平成 8 年 4 月	猫に関する問題検討委員として、ネコの室内飼養推進及び地域ネコ推進計画等の検討等、室内飼養に関するマニュアル作成および動物保護管理審議会答申用資料「ネコと楽しく暮すには」を作成し、各種適正飼養講習会で応用した。東京都衛生局編
・業務資料	平成 10 年 11 月	「HACCP 監視マニュアル」作成委員として、HACCP 監視のための視察及び帳票類の査察方法について具体的にガイダンスを作成した。HACCP 監視員研修で使用し、外部検証の際に効果を発揮した。
・講習会資料作成	平成 12 年 4 月	動物の適正飼養を推進するため、犬とネコについて講習会教材として、パソコンプレゼンテーションとハンドアウトを作成した。「犬と楽しく暮すには」、「マナーアップ：犬のしつけ方」は、日常の適正飼養講習会や出張形式の講習会等で数多く使用された。

<ul style="list-style-type: none"> ・業務資料 	平成 14 年 4 月	<p>東京都の動物愛護推進基本計画検討委員として、「ハルスプラン」のとりまとめおよび動物保護管理審議会答申用資料を作成した。15 年の長期整備計画である。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学外科実習用資材 1 リバルタ反応検査用 	平成 18 年 6 月～ 平成 21 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する精密検査サンプルは、実際に感染創から採取するのは危険なため同様の蛋白質、脂肪組成の材料を調整し、学生は新鮮なサンプルの様子を安全に観察できるようにした。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学外科実習用資材 2 内視鏡検査用モデル：内視鏡くん 1 号 	平成 18 年 8 月～ 平成 28 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する内視鏡検査のモデルを作成した。内視鏡使用の目的、使用後の消毒・洗浄等の管理に大切さを履修させるのに役立っている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学内科実習用資材 1 小動物臨床栄養学 1 と 2 	平成 18 年 9 月～ 平成 21 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学内科実習」で使用する、小動物臨床栄養学のケア・プラン組み立て資材及びオーガニック(減農薬)材料を応用した食餌性アレルギー動物向けトリーツ作成キットを作成した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学外科実習用資材 3 整形外科補助機材 	平成 18 年 9 月～ 平成 23 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する整形外科実習用トーマス・プリントを、市販品ではなく学生に手作りさせるキットを考案した。包帯法の実習に応用している。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学外科実習用資材 4 レントゲン撮影モデル No1 	平成 18 年 10 月 ～平成 28 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学外科実習」で使用するレントゲン撮影用モデルを作成した。犬の標本ではなく軟部組織のついた撮影モデルは、撮影後のレントゲンフィルムの現像や定着の具合を評価するのに役立っており、学生に好評である。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学内科実習用資材 2 幼弱動物の看護と補助栄養 	平成 18 年 10 月 ～平成 22 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学内科実習」で使用する、新生児の看護実習用モデルを作成した。子猫のさい帯処理及び補助栄養の胃チューブ調整キットである。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床看護学外科実習用資材 5 病理学診断：解剖検査モデル 	平成 19 年 1 月～ 平成 22 年 3 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する「病理学診断：解剖検査モデル」として、新鮮で食肉衛生検査に合格した豚の臓器を応用して実習する方法を確立した。リンパ節などから採材する方法を学生に履修させた。感染症等の危険も防止できるので安全である。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・動物医療機器論実習機材 1 高周波電気メス用実習資材 	平成 19 年 6 月	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科専任講師として担当の「動物医療機器論実習」で使用する、高周波電気メスの原理、使用後の管理について学習するための材料及び方法を確立した。</p>

<ul style="list-style-type: none"> 臨床看護学外科実習用資材 6 創傷の治療実習用モデル 臨床看護学外科実習用資材 7 皮膚縫合実習資材開発 臨床看護学外科実習用資材 8 内視鏡検査用モデル：内視鏡くん 2号 	<p>平成 19 年 10 月</p> <p>平成 20 年 6 月</p> <p>平成 20 年 8 月</p>	<p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科准教授として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する感染症想定創傷治療モデルを作成した。火傷治療等を想定した実習を可能とした。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科准教授として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する外科手術補助に関する実習で使用する、縫合実習用皮膚材料を調整した。学生は、自ら縫合を行うことにより、補助実務のコツを履修した。</p> <p>ヤマザキ動物看護短期大学動物看護学科准教授として担当の「臨床看護学外科実習」で使用する内視鏡くん 1 号の改良タイプである内視鏡くん 2 号を作成中した。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ヤマザキ学園大学における評価 ヤマザキ動物看護短期大学における評価 	<p>平成 27 年 9 月</p> <p>平成 15 年 6 月</p>	<p>当該教員は、動物衛生看護師の社会的地位向上や認知度を挙げる為に 4 年制大学協会のカリキュラム委員会委員として、共通コアカリキュラムの作成、認可に尽力し、全国動物保健看護系大学協会編集の共通教科書にあたった。民間資格である、動物看護師統一認定資格試験について、NPO 法人日本動物衛生看護師協会の資格認定委員として新しい資格制度の振興管理に尽力し、現在に至る。大学においては、学生の信頼も厚く、動物リハビリテーションといった新しい分野の卒業論文を指導するかたわら、千葉科学大学の危機管理学部専攻課程で「総合危機管理」について学び、修士号（危機管理学）を取得した。3 年次学生全員アッセンブリーアワーにおいて平成 24 年より、東京消防庁、東京防災救急協会と連携し「普通救命講習」を実施、命の教育を実践している。海外研修旅行の引率なども、積極的にこなす等、責任感と統率力を評価している。</p> <p>当該教員は、東京都健康局において公衆衛生獣医師として乳肉食品や輸入食品の衛生検査や監視業務に従事し、また新しい食品の危害防止策である HACCP の外部検証認定員として都民の食品に関する安全確保に幅広く貢献している。一方、獣医大学を卒業後動物病院開業をめざして 24 時間体制の獣医医療について救命救急医療やパワーリスク下麻酔管理等専門的な訓練を民間動物病院にて履修し、動物管理事務所や動物愛護相談センターにおいて実践的な臨床業務の指導を積極的に果たし高い評価を得ている。長年にわたる動物行政の経験と海外における野生動物保護のボランティア活動はヒトと動物の共生めざす社会確立のためにより具体的な問題提起等、セミナー参加学生の授業評価も高い。豊富な実務経験から、現代社会が求める動物に関するスペシャリスト養成について本学の学生を的確に導き、情報把握、分析、問題解決へと迅速に対応できるものと評価する。動</p>

		物看護学部の構想段階から、カリキュラム検討等について積極的に関与した。行政職にあつては、各種プロジェクトチームに多く選任され動物愛護推進や普及啓発において中心的な役割を果たしてきた。こうした、行政における公衆衛生獣医師としての実務経験と専門知識は、本学において予定している授業科目を担当するために十分な教育上の能力を有しているものと評価する。
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 豪州における研修留学 ・ 乳等省令に関わる公定検査法の指導 ・ 食肉中の抗菌性物質の検査方の指導 ・ 公衆衛生学実習 ・ 公衆衛生学実習 ・ 公衆衛生学実習 ・ 動物愛護普及啓発実習 	<p>昭和 53 年 4 月～ 昭和 53 年 6 月</p> <p>昭和 58 年 7 月～ 昭和 58 年 8 月</p> <p>昭和 62 年 7 月～ 昭和 58 年 8 月</p> <p>昭和 63 年 8 月～ 平成 3 年 8 月まで 毎年 1 回</p> <p>昭和 63 年 11 月</p> <p>平成 4 年 6 月</p> <p>平成 8 年 8 月～平成 10 年 3 月まで 合計 75 回</p>	<p>ヴィクトリア州立獣医学診断センター（ハミルトン市）においてフィールド実習：大規模放牧肉用牛の Pink Eye の感染調査、各種理化学検査及び、病理組織学診断法について学ぶ。</p> <p>（株）清水乳業、商品管理質の検査担当者の新人研修を担当した。乳等省令に関わる理化学検査法、大腸菌群の検査法、抗菌性物質の検査法、食中毒起因菌の分離同定法について実習指導した。検査に関する精度管理について指導した。（1名）</p> <p>（株）ゼンチク、商品安全管理室の検査担当者の実務研修を担当した。食肉中の残留抗生物質の検査法について実習指導した、感受性菌の管理方法検量線の引き方、回収率の算定方法について指導した。（2名）</p> <p>農工大学獣医学科 4 年生：食肉衛生検査に関する見学研修（32 名～34 名）生体検査、内臓検査、枝肉検査、頭部検査、精密検査（マクロ病理,病原細菌検査残留抗生物質検査等について）食肉検査法及び、食品衛生法について解説した。</p> <p>日本獣医畜産大学獣医学科 4 年生：食肉衛生検査に関する見学研修（48 名）生体検査、内臓検査、枝肉検査、頭部検査、精密検査（マクロ病理,病原細菌検査残留抗生物質検査等について）食肉検査法及び、食品衛生法について解説した。</p> <p>東京医大 6 年生：公衆衛生医研修、保健所にて公衆衛生学実習生 5 名を受け入れた際、食品関係営業のうち大手の乳処理施設の乳製品製造業並びに調整粉乳処理施設の食品衛生監視に同行させ事故防止の監視ポイント等について指導した。ヒトと動物の感染症について、VTR を利用して感染予防についてガイダンスした。</p> <p>日本動物学院専攻研究コース生に対し CAPP 動物の選考法と日常の健康管理について実習を含めて指導した。公立小学校の低学年向け、生活科の授業で動物愛護、ヒトと動物の感染症予防、犬による咬傷事故防止など 3 つの柱を基本に児童に対する教育実技を演習指導した。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 牧場実習指導 	平成 13 年 7 月	麻布大学獣医学部獣医学科 4 年生の豪州における牧場実習指導（酪農家、肉用牛牧場、鹿牧場、アルパカ牧場、ダチョウ牧場）体験実習の計画指導並びに調整を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ペットロスに関する研修指導 	平成 14 年 11 月	大正文化大学 4 年生、卒論で「ヒトと動物の絆、ペットロス」をテーマにしている学生ヒトと動物の関係学会の資料等を応用してレクチャーを実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都動物愛護相談センター多摩支所における職場内研修講師 	平成 13 年 6 月	OJT として「ネコの飼養管理について」20 名に講習を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都動物愛護相談センター多摩支所における職場内研修講師 	平成 13 年 8 月	OJT として「小動物の栄養学」19 名に講習を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都動物愛護相談センター多摩支所における職場内研修講師 	平成 14 年 2 月	OJT として『海外における狂犬病発生の動向について』24 名に講習を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 八王子市南大沢地区市民講座 	平成 16 年 9 月～ 現在に至る	グリーン・コープ及びパークサイド南大沢の住民を対象として「適正飼養講習会、動物医療相談」を合計 7 回実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 横浜市獣医師会有志講習 	平成 17 年 8 月	獣医師および動物看護師を対象として「犬の問題行動に関する対処法」講習を 2 回、「猫の問題行動に関する対処法」講習を 1 回実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 横浜市大倉山ペットクラブ講習 	平成 17 年 11 月	ペットクラブ飼い主を対象として「適正飼養講習会、動物医療相談」を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都認可動物愛護団体講習 	平成 17 年 4 月～ 現在に至る	「動物に関する法令、適正飼養講習、問題行動の見分け方、譲渡対象犬のセレクション方法、ヒトと動物の共通感染症防止、動物に関する苦情防止」等講習会を合計 9 回実施した。
<p>5 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 犬における先天性疾患の診断 	平成 17 年 2 月	遺伝疾患、先天性疾患の診断方法・評価法に関する研修を受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 上部消化管内視鏡による特殊染色応用診断法 	平成 17 年 8 月	上部消化管における腫瘍性疾患における新しい検査診断法講習会を受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ X-線・画像診断法 	平成 17 年 8 月	胸部 X-線撮影における LA 防止に関する講習を受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 小動物における早期不妊・去勢手術の有効性について 	平成 17 年 9 月	米国、カルフォルニア州における不妊・去勢手術専門病院の対応及び、施術法に関する講習を受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国における動物の権利と人権について 	平成 18 年 8 月	米国における人権、動物福祉に関する講習を受講した。

<ul style="list-style-type: none"> ・英国における動物虐待監視業務について 	平成 18 年 11 月	英国王立動物虐待防止協会の調査部長による講習を受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ミニチュアダックスフンドにおける椎間板ヘルニアのリハビリテーション 	平成 21 年 2 月	小型犬に特徴的な椎間板ヘルニアの評価、リハビリテーション導入、予後について受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・RSPCA 動物福祉短期研修会 	平成 21 年 2 月	改正英国動物愛護法、動物虐待の証拠確保から立件まで、サイト・ビジット演習による評価を受講した。英国王立動物虐待防止協会国際部、教育担当官による。
<ul style="list-style-type: none"> ・エライザ変法を用いた E 型肝炎の検出法研修 	平成 27 年 10 月	山口大学共同獣医学部微生物学研究室にて、研修を受講した。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許 <ul style="list-style-type: none"> ・獣医師免許 ・表示付放射性同位元素取扱い主任者証 ・麻薬研究者免許 		
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 <ul style="list-style-type: none"> ・豪州における研修留学 	昭和 53 年 4 月～ 昭和 53 年 6 月	ヴィクトリア州立獣医学診断センター（ハミルトン市）において家畜及びペット動物の疫学診断に必要な生化学検査、病理組織学検査等について研修した。フィールドにおいて肉用放牧牛の Pink Eye 罹患状況調査を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・動物病院における臨床業務 	昭和 53 年 7 月～ 55 年 8 月	網代動物病院にて小動物臨床の基礎及び病院管理運営について実務を積む、救急救命治療、プワールリスクの患畜の麻酔管理等の特訓を受けた。臨床検査データの解析、精度管理について実習生を指導した。
<ul style="list-style-type: none"> ・東京都衛生局環境衛生部獣医衛生課 日野牛乳検査室勤務 	昭和 55 年 9 月～ 60 年 3 月	東京都衛生局に入局、環境衛生部獣医衛生課日野牛乳検査室にて食品衛生監視員として乳等に関する省令を担当した。大手乳業メーカーの原料の生乳の衛生検査並びに、製品の一般規格試験、負荷試験（増菌検査、保存試験）、抗菌性物質、残留農薬、容器の耐性試験等実務を担当。食中毒起因菌、病原細菌の分離同定スペシャリスト特訓を受け乳業メーカーの衛生指導を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・東京都衛生局環境衛生部食品監視課指導係勤務 	昭和 60 年 4 月～ 62 年 3 月	環境衛生部食品監視課にて食品衛生監視員として広域食品監視業務を担当、特別監視計画（夏季対策、歳末一斉）の立案及び都・区・食品収去・検体搬入の調整保健所でこじれた食品苦情の調整

		担当、他府県との連絡調整。苦情処理集計表作成、輸入食品の違反処理（ジ・エチレングリコール入りワイン事件、ポリソルベート混入即席めん、チェルノブイリ原発事故先行調査）担当した。
・東京都多摩食肉衛生検査所検査課精密検査担当	昭和 62 年 4 月～ 平成元年 3 月	食肉衛生検査所にて食肉衛生検査員、食品衛生監視員として勤務。全国の公的食肉衛生検査所が加盟する全国食肉衛生検査所協議会理化学部会事務局として検査データのとりまとめ、マニュアル作りに従事した。食鳥検査法施行のため統一検査方法の検討、スタンダード抗菌剤の検査方検討と精度管理のための回収試験の実施。病原細菌の分離同定、確定検査法を検討した。
・東京都多摩食肉衛生検査所管理課業務係	平成元年 4 月～ 平成 4 年 3 月	食肉衛生検査員、食品衛生監視員として勤務した。農工大学の獣医学生、日本獣医畜産大学の獣医学生、実践女子大の栄養科学士の研修見学を担当した。全国食肉衛生検査所協議会事務局を担当、国立公衆衛生員にて食肉衛生検査員講習会の開催、病理部会のコンピューター音声入力マクロ病理用語検討委員。タイ国立公衆衛生員研修留学生の見学研修を担当した。
・東京都東村山保健所衛生課食品・獣医衛生係	平成 4 年 4 月～ 平成 8 年 3 月	東村山保健所にて、食品衛生監視員、狂犬病予防員、動物監視員として勤務した。食品関係営業の衛生検査及び、講習会を担当した。保健所独自計画研究発表担当した。狂犬病予防注射の集合注射計画実施、咬傷事故調査、再発防止指導。動物取扱業、特定動物の許可確認、動物病院の開業実査を担当した。食中毒発生調査ノミ・ダニアレルギーに関する調査を環境衛生監視員として実施した。集合住宅におけるペット飼養モデル案検討委員、動物愛護普及啓発 V T R 委員保健所再編整備動物行政検討委員を歴任した。
・東京都動物管理事務所西部支所	平成 8 年 4 月～ 平成 10 年 3 月	東京都動物管理事務所西部支所にて、狂犬病予防員、動物監視員として勤務。臨床獣医として、負傷動物の治療を担当した（X線管理者）。幼稚園、小学校向け「動物ふれあい教室」担当、愛護普及啓発関連見学研修を担当した（毒劇物管理者）。ネコに関する問題検討委員を歴任した。
・東京都食品環境指導センター業務課ハサップ指導係	平成 10 年 4 月～ 平成 12 年 3 月	食品環境指導センターにて食品衛生監視員として、乳製品及びその加工食品の広域監視、検査を担当した。H A C C P の許可申請の相談窓口、外部検証のための H A C C P 検査員研修担当収去検査及びサンプリング精度管理担当した。
・東京都動物愛護相談センター多摩支所	平成 12 年 4 月～ 現在に至る	狂犬病予防員、動物監視員動物愛護相談センターにて臨床業務を担当した。動物の適正飼養講習会担当、地域ネコ推進計画担当。東京都の動物愛護推進基本計画検討委員、「ハルスプラン」作業部会担当した。

<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアコアラ保護基金によるフィールド調査 	平成 13 年 11 月	2001 コアラ学会に参加、ヴィクトリア州フレッチ島にて生体調査を行った。
<p>4 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境省の委託調査 ・社団法人日本動物福祉協会 ・財団法人日本動物愛護協会 ・NPO 法人日本動物看護師協会 ・NPO 法人日本動物看護師協会 ・第 3 回ヤマザキ動物愛護シンポジウム ・優良家庭犬普及協会シンポジウム ・NPO 法人日本動物看護師協会 ・NPO 法人日本動物衛生看護師協会 ・麻布学会 ・日本獣医内科学アカデミー 日本獣医臨床病理学会 ・ヤマザキ動物看護短期大学における役職経験 	<p>平成 16 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 16 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 16 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 18 年 12 月</p> <p>平成 19 年 12 月</p> <p>平成 20 年 10 月 12・13 日</p> <p>平成 20 年 10 月 19 日</p> <p>平成 20 年 12 月</p> <p>平成 28 年 8 月</p> <p>平成 20 年 4 月～ 現在に至る</p> <p>平成 21 年 2 月 14 日</p> <p>平成 19 年 4 月～ 23 年 3 月</p>	<p>自治体向け資料作成、ヒヤリング対応、家庭動物、飼い主のいない猫対策、咬傷事故防止策、動物に関する苦情対応等を調査した。</p> <p>チャリティーイベントの手伝い、動物の搬送業務動物の譲渡協力、17 年度新東京支部設立、副支部長となる。20 年 6 月日本動物福祉協会評議員となる。</p> <p>チャリティーイベントの手伝い、平成 19 年 4 月より会報誌「動物たち」編集委員となる。平成 19 年 5 月啓発事業委員となる「動物親子教室」を企画、運営した。</p> <p>アニマルヘルステクニシャン資格認定員に委嘱された。</p> <p>アニマルヘルステクニシャン資格認定員に委嘱された</p> <p>環境省、心の東京革命推進会議、渋谷区教育委員会、八王子市教育委員会、(財)・日本動物愛護協会、(社)・日本動物福祉協会、(社・福)・日本介助犬協会後援、「動物愛護と青少年の教育を考える」パネルディスカッションの座長および企画をした。</p> <p>「動物保護施設の現状と課題、～幸せな家庭犬になるために・シェルターワークの事例紹介～」保護動物の家庭内検疫のすすめについて報告した。</p> <p>アニマルヘルステクニシャン資格認定員に委嘱された。 ベテリナリーテクニシャン資格認定員に委嘱された。</p> <p>NPO 法人日本動物衛生看護師協会理事に就任した。</p> <p>麻布学会学術委員に委嘱された。</p> <p>日本獣医内科学アカデミー・日本獣医臨床病理学界 2009 年大会、日本動物衛生看護師協会（動物看護職セミナー）にて「動物看護とリハビリテーション」を講演した。</p> <p>学生委員会副部長として学生指導をしている。</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 身勝手な飼い方をされるペットたち	単著	平成11年9月	大日本図書	ペットブームの裏側で起きている現状、ヒトと動物の共生をめざすにはどのような理解や努力が必要か。少子高齢化の進展により益々伴侶動物との絆が求められるなか、正しい動物飼育法の知識の普及が大切である旨を説明した。 全 149 項
(学術論文) 1 身体障害者補助犬に関する認知度について	共著	平成18年1月	日本身体障害者補助犬学会	身体障害者補助犬法改正後、社会に於ける認知度について調査したところ、法律の名前は知っていても内容はわからない等の問題点から身体障害者とその補助犬入店を拒否するケースもあり、活躍の場を確保するには低学年のうちから、動物に関する正しい知識や動物愛護思想の普及啓発を推進すべきである旨を報告した。 本人担当部分：身体障害者補助犬の法律と背景について担当 共著者名：塚原瑠香、 <u>本田三緒子</u>
2 秋田犬における毛色発現に関する mclr の分析について	共著	平成 18 年 6 月	2006 20th IUBMB 国際学会、生化学・分子生物学会	ネズミの毛色決定に関して、 Mclr が関与することが分子生物学的に解明されている。犬のゲノム解析についてはその殆どが解析され、人の病気予防や治療に役立っている。日本犬である秋田犬は、第二次世界大戦を契機に飼養頭数が激減したために国の天然記念物でもある、その毛色について西洋犬とは異なる毛色決定メカニズムについて 26 頭の秋田犬について解明のための基礎研究を行った。 本人担当部分： 共著者名： <u>本田三緒子</u> 、
3 盲導犬と利用者の健康管理について	共著	平成 18 年 8 月	日本身体障害者補助犬学会	盲導犬利用者の人工透析施術の際にヒトと動物の共通感染症予防、若しくは盲導犬について動物福祉という点でどのような問題が生じるかを報告した。 本人担当部分：感染症対策やアレルギーへの配慮
4 秋田犬における毛色発現に関する mclr の分析について II	共著	平成 19 年 12 月	2007 21 th 生化学・分子生物学会	第 2 報、秋田犬の赤、白、ゴマ、トラ毛について詳しく解明した。DNA 標品の生成等に関する検討をした。遺伝情報の解析検討プログラムを試作した。マイクロサテライトを応用した解析をした。 本人担当部分：サンプリングおよび検査 共著者名：小黒美枝子、 <u>本田三緒子</u>

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5 家庭犬の口腔細胞からの DNA サンプル調整法とヨークシャーテリアのメラノコルチン 1 レセプター遺伝子の単離と同定	単 著	平成 20 年 9 月	第 83 回麻布獣医学会	犬種、その大きさを問わず、滅菌綿棒 1 つで採取した口腔細胞から遺伝子クローニングやマイクロサテライト解析に使用可能な DNA 標品を手軽に大量に調整する方法を確立した。
6 秋田犬の毛色表現型に影響するベーターデフェンシン 103 について	共 著	平成 20 年 12 月	2008 22th 生化学・分子生物学会	秋田犬の毛色（表現型）について、マイクロサテライト解析により、赤とトラ毛について検討した。CFA16 の上の CBD103 近くの FH2155 マーカーを完全に支配、白は Mc1r の R306 の同種接合性に関与している旨を報告した。 本人担当部分：サンプリングおよび検査 共著者名：小黒美枝子、 <u>本田三緒子</u>
7 生活訓練・デイケア事業支援における AAA 実施取り組みについて	単 著	平成 21 年 3 月	ヤマザキ動物看護短期大紀要 p 167～p 170	通所訓練部門：思春期・青年期医療デイケアにおける AAA（動物介在活動）の展開方法に関する検討をした。
8 動物病院における医療安全について（修士論文）	単 著	平成 26 年 3 月	千葉科学大学危機管理学研究科	動物病院における医療安全について、アンケート調査を行い、危機管理について取りまとめたもの、感染症対策について一番大切であるという内容、病院スタッフの健康管理も良い医療を提供するには大切である旨をまとめた。
9 動物病院における医療安全について	—	平成 26 年 7 月	日本動物看護学会第 23 回	動物病院における医療安全について、アンケート調査を行い、動物看護師が県連する危機管理について報告した。
(その他) 「学会発表」				
1 動物介在活動の効果について	—	平成 10 年 9 月	東京都衛生局学会第 100 回	保健所のデイケア支援事業についての動物介在活動の効果を報告した。 共同発表者：高木晶子、 <u>本田三緒子</u>
2 生乳中に検出される病原細菌に関する実態』調査	—	平成 12 年 11 月	東京都衛生局学会第 104 回	東京都内の乳処理工場で生産に使用される原料乳の病原細菌汚染実態について調査し、結果について取りまとめ報告した。
3 ネコの適正飼養講習会参加者意識調査	—	平成 14 年 11 月	第 77 回麻布獣医学会	東京都ですすめるネコの適正飼養講習会参加者に対してネコの飼養実態について調査し最新の動向についてとりまとめた。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
4 都立公園における動物適正飼養啓発事業について第1報	—	平成14年8月	動物保護相談センター研究発表会	都立公園利用者のマナーアップ講習会の取り組みと、参加者のマナー意識に関して調査した結果を報告した。
5 都立公園における動物適正飼養講習会（飼い主と犬の参加方式）	—	平成15年2月	動物保護相談センター研究発表会	都立公園利用者のマナーアップ講習会参加者から希望が多かった、しつけ方の飼い主が犬を連れた参加方式の講習結果を報告した。
「報告書」				
1 豚の盲腸内容物における細菌叢について	—	昭和63年10月	食肉衛生検査所事業概要	関東近縁から搬入される肥育豚の盲腸内容物中の病原細菌：サルモネラ、カンピロバクター、エルシニア、黄色ブドウ球菌に関するモニタリング結果を報告した。
2 バイオアッセイによる鶏肉の抗コクシジウム菌の検査方について	—	平成1年2月	食肉衛生検査所事業概要	厚生省の委託を受けた都立衛生研究所乳肉研究科からの依頼で全国6箇所の食肉衛生検査所精密検査担当が5薬剤の検査法、回収試験結果をまとめた
3 リステリアモノサイトゲネスの分離培養比較	—	平成3年7月	東京都衛生局学会第87回	検査フィールドにおける増菌培養及び分離培養結果、手法検討部分の3年間の実績を報告した。 共著者：飯田孝、 <u>本田三緒子</u> 、神崎政子
4 動物愛護思想の普及啓発事業（小学校のふれあい教室、教師の意識調査）	—	平成9年9月	動物管理事務所事業概要	小学校生活科低学年向け「動物ふれあい教室」受け入れ担当教師に、受講後児童の理解度や感想等についてまとめた
5 動物介在療法の効果について第1報	—	平成10年3月	動物管理事務所事業概要	区内3ヶ所の保健所で開催したデイケア（機能的な精神障害）通所参加者に対して、医療スタッフと連携して動物介在活動を行った結果を報告した。
「雑誌掲載」				
1 どうぶつたちとともに生きる	—	平成10年4月	クレヨンハウス社月刊誌「く～よん」4月号	公衆衛生獣医師として動物行政にたずさわる立場として「ヒトと動物の共生をめざす社会」について子供と動物の関りについて解説した。
2 ヒトと動物の感染症について	—	平成13年4月	寿出版（株）「月刊ことぶき」	中高年向けの健康雑誌にて、春先の動物と人が注意すべき感染症について解説した。
3 中高年のための動物飼育入門	—	平成13年5月	寿出版（株）「月刊ことぶき」	中高年向け健康雑誌にて、家族構成や家庭環境に合うペット動物の選定方と飼養管理について解説した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 みおこのアニマル通信	—	平成 14 年 1 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「良いペットショップについて」の見つけ方環境や動物の社会化の必要性について解説した。
5 みおこのアニマル通信	—	平成 14 年 3 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「ドックランについて考える」欧米と日本の飼い主のマナーを比較した。
6 みおこのアニマル通信	—	平成 14 年 7 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「動物の安楽死について考える」安楽死に関する倫理、判定基準を解説した。
7 みおこのアニマル通信	—	平成 14 年 10 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「動物とこどもたち」動物が子供に与える影響について解説した。
8 みおこのアニマル通信	—	平成 15 年 1 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「ねこの未来を考える」ネコの適正飼養をめざす取り組みについて解説した。
9 みおこのアニマル通信	—	平成 15 年 3 月	(財) 日本動物愛護協会誌 連載記事：愛は動物と共に	「宇宙船地球号へ、エクスプローラーをめざして」次世代に託す動物愛護について解説した。
10 狂犬病について	—	平成 15 年 4 月	インターZoo社 雑誌「az」4月号	アニマルヘルステクニシャン向け、今さら聞けないシリーズ「狂犬病」について詳しく解説、海外で事故にあった際の対処方等を解説した。
11 リハビリテーションにおける動物看護師の役割	—	平成 23 年 5 月	JVM 獣医畜産新法 Vol64 No5 p383～p386	特集 犬と猫の理学療法とリハビリテーションについて動物看護師の果たす役割、勉強方法について解説した。
12 新・小動物看護用語辞典	—	平成 24 年 4 月	株式会社インターズー	小動物・外科関連用語解説を担当した。
13 臨床動物看護学総論	—	平成 26 年 5 月	全国動物保健看護系大学協会カリキュラム委員会編	小動物臨床看護学総論を担当した。 (株)インターズー
14 基礎動物看護学各論	—	平成 26 年 10 月	全国動物保健看護系大学協会カリキュラム委員会編	小動物臨床看護学各論を担当した。 (株)インターズー

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
15 動物公衆衛生学	—	平成 27 年 12 月	全国動物保健看護系大学協会カリキュラム委員会編	監修担当、第 1 章 1-1、第 4 章、3・4 動物看護師に必要な公衆衛生学についてとりまとめたものを担当した。 (株)インターズー
16 野生鳥獣食肉の安全性確保に関する報告書	—	平成 28 年 3 月	平成 27 年度厚生労働科学研究「野生鳥獣由来食肉の安全性確保」研究班	ジビエ料理に使用する鹿肉について食中毒細菌、E 型肝炎ウイルス、住肉胞子虫について安全性について調査し、報告をまとめた。
17 わが国の鹿及び猪における病原性 Yersinia の保菌状況	—	平成 28 年 9 月	第 159 回日本獣医学会・学実集会（日本大学）	日本国内の鹿（274 頭）、猪（49 頭）の直腸便から、74.8%、猪では 74.8% のエルシニア属菌を検出し、野生動物に保菌率高いことを報告した。（高橋、壁谷、佐藤、山崎、鎌田、平、小西、丸山）
18 わが国の鹿における志賀毒素産生大腸菌群と O157 分離株の系統解析	—	平成 28 年 9 月	第 159 回日本獣医学会・学実集会（日本大学）	日本国内の鹿における志賀毒素産生大腸菌群の保有状況と O157 分離株の系統を分析し、鹿 323 頭について検討した結果、49 株に関して 11.8% が STEC、2.8 % が O157 であったことを報告した。（村上、黒田、壁谷、サトウ、横山、平井、山崎、鎌田、平、小西、丸山）
19 市販ジビエ食肉の細菌汚染の実態と構成菌叢に関する検査	—	平成 28 年 9 月	第 43 回防菌防黴学会・年次大会	平成 27 年 10 月～28 年 3 月まで 18 都道府県の猪肉・128 検体鹿肉・118 検体について調査を行った。猪は大腸菌陽性率が 65.6%、鹿は 11.9% であった。解体処理工程における、衛生管理の徹底が必要である。（森、安河内、小西、杉山、五十君、朝倉）